

企業トップ

南甲倶楽部会員

インタビュー

南甲



足立直樹・凸版印刷(株)社長

当時から多い地方出身の苦学生
バイトで稼ぎ寸暇を惜しんで勉強

——はじめに、会社経営のトップを担っていらっしゃる足立社長が学生時代をどのように過ごされていたのか、お聞きしたいと思います。

足立直樹社長 僕は昭和37年卒業ですから、今の学生の皆さん方に想像できるような経済状態、社会情勢ではなかったような気がします。僕は高

等学校までは実家の静岡県の浜松に近い袋井というところでした。磐田南高校を出て、東京に来ました。まだまだ経済的に大変厳しい状況ですよ。今のように誰でも大学に行けるわけではない、もしくは学力があっても経済状態で行けなかったという時代だったわけですよ。

中央大学の学生というのは、今でもそうですけれども、地方から来ている人が大変多かった。なので、基本的には大変苦学生が多かったというこ

とです。今は皆さん、どうですか。アルバイトをやっているわけでしょうか？

—— はい。

足立 アルバイトは何のためにやっているんですか。

—— 私は生活費捻出です。

—— 私は娯楽費とかですね。

—— 僕も生活費を稼いでいます。

足立 生活費ですね、学費はどうしています？

—— 学費は親に出してもらっています。

足立 親に依存していますよね。

—— はい。

足立 しかし、我々のときには親が入学金だけ出して、あとは自分で生活しなさいということでした。僕は大学に入るとともに家族みんなが東京に来たものだから、運よく自宅から通えたので、食べる物には困らなかつた。けれども、僕はもう親に面倒をかけてはいけないということで、学費から遊ぶお金から何でもかんでもアルバイトで稼いだものですよ。

そういう中で、ものすごく勉強の意欲に燃えて東京に来ている仲間が多かったわけです。何がなんでも勉強しなければいけない。しかし、学費も稼がなければいけない、生活費も稼がなければいけないということだから、寸暇を惜しんで勉強もするというのが、学生時代の仲間だったのです。

法律用語が飛び交う会話 強い仲間意識で助け合い

—— どんな学生生活だったのでしょうか。

足立 学生時代は、物事に真剣に取り組んでいましたよ。例えば、お茶の水の近辺には名曲喫茶が並び、シャンソンの喫茶店があり、画廊のような喫茶店があり、みんながそこに入り浸っていたのだけれども、そのときでも、何かというと法



「学生時代は？」と学生記者

律論で議論をしていましたよ。「それやるとお前、未必の故意だよ」とか、そういう言葉が会話の中で常時行き交っていたわけです。

その会話についていけないと輪に入れなくなり、仲間からも離れていってしまうわけです。別に弁護士になろうとか司法試験に通ろうという目的でなくても、そういう言葉が常に学生生活の中で行き交っていた。そういう専門用語が、皆さん方の間でお茶を飲んでいても飛び交いますか。

—— いや、飛び交わないですね。

足立 飛び交わないでしょう。我々の時はすぐそういう言葉が、「何条に違反する」とかね。そうすると、パツと六法を見る。

そういう生活だったのです。多分、他の学部の人でもそんなのでしょうか、法律科の人は特にそうだったのです。遊ぶときも真剣に遊ぶし、常にそういう学生生活でした。ものすごく楽しかったです。

それから、仲間意識が強かったです。生活費に困っているやつがいると、何とかみんなんで助け合って、せめて食事だけは食べさせてやろうと

か、そういう時代だったです。何も無い苦学生で、家からお米を送ってくると醬油とバターだけで生活しているやつとかね、そういう苦勞をしている学生がたくさんいたわけです。

本は全部買って読み、保存 何でも手当たり次第に濫読

—— 学生時代に熱心に取り組んだことは何ですか。

足立 僕は一生懸命本を読みました。僕は会社に入ってきた新人社員にも、「本を月に何冊読みますか」「読んだ本を持っていますか」と聞きます。皆さんは読んでしまった本は持っていますか？ み

南甲倶楽部 中央大学を卒業し、実業界で活躍している経済人による親睦団体。昭和27年（1952）、当時の中大出身経済人の発議で誕生し、大学の旧校舎が駿河台南甲賀町に在ったことから、この名称が命名された。

現在、南甲倶楽部は学員（卒業生）で、実業に関係するすべての人に入会の門戸が開かれており、会員数は約850名。製造業から流通、サービス業など幅広い分野で活躍し、大企業から少人数のベンチャービジネスにいたる会員で構成されている。

相互の親睦を深めるため、講演会、卓話会はじめ工場見学や、囲碁、俳句、ゴルフなどの趣味の分野まで幅広く活動している。また、『南甲倶楽部賞』を設け、毎年度、顕著な成果をあげて大学の名声を高めた学生を表彰している。

凸版印刷株の足立直樹社長は、南甲倶楽部8代目会長。



学生記者の質問に答える足立社長（右端）

んな取ってある？

—— はい。

—— 僕は図書館で借りてしまうので返してしまいます。

足立 僕は全部自分で買う。極端なことを言ったら、自分で買って自分で読んだ本の90%を持っていきますよ。それで、今はやらなければいけません、本を開けたところの一番上に何年何月に買ったというサインをちゃんとしてね。文庫本であろうと単

行本であろうと、そうやって全部取ってある。

その本を眺めているのが楽しくてね。それで時々眺めて、ああ、そうか、こんなことが書いてあるのかということをもう一度思い出す。そういうことで、僕はものすごく本を読むことが好きでしたね。

—— どんな本を読まれたのですか？

足立 あらゆるものを濫読しました。何でもいから手当たり次第。どうしてこんな本まで読んできたらいい。親父が読んでいた本を読んでみたりね。小説から随筆からあらゆるものを含めて、僕は何でもいいと思っっているのです。

—— とにかく、たくさん読むということですね。

足立 よく言うのだけれども、人間というのは忘れる動物なのです。だから、読んでどんどん忘れてしまっただけなのです。

忘れる以上に覚えればよい

新聞を読まない今の学生

—— 忘れていいんですか(笑)。

足立 読んだものをどんどん忘れていい。忘れる以上に覚えることなのです。二つ忘れたら、三つ覚えればいいのです。三つ忘れたら四つ覚えればいいのです。ただし、問題は、「どんなことがあるのか」ということが頭のコンピュータの中の

にインプットされ、ちゃんとジャンルごとに整理されているかどうかですよ。

社会人になったときに少しずつアウトプットしていくわけでしょう。だから知識が枯渇したら、その人はそれで終わりなのです。だから常に本を読んでインプットしなければいけない。本だけでなくいろいろなことを勉強しながら、それをちゃんと整理して、こんなことは誰に聞けば分かるのかとね。

会社だってそうですよ。これはこの人に聞けば分かる、このことはどこそこに行けば分かるというものが分かっているわけでしょう。だから、たくさん本を読んで、たくさん知識を持っている人ほど、社会に出ても役立つということです。当時は学校の本以外の本をみんな持って歩いていたのですよ。今は持って歩かないでしょう。

—— 僕は1冊、常に。

足立 常に持っている？ 常に何か読んでいる？ 常に持って読むという習慣だね。それからもうひとつは、手紙を書くということ、文字を書くということ。パソコンとかメールではなくて、自分の手で書くということ。そうすると脳の活性化になる。

それと今は新聞を読む人が少ない。入社第一日に新入社員を集めて、今日の新聞を読んだ人は手を挙げると言うと、1割ぐらいしかいない。み

なさんは新聞をとっていますか？。

世間知らずが多い中大学生

取柄は真面目で素朴で純朴

—— 私はとっています。朝1時間ぐらい頑張って読んでいます。

足立 それは偉いね。それと今朝、(採用試験の)面接をやっているうちの人事担当者、中央大学の学生をどう思うか印象を聞いてきた。その人は役員で中央大学出身なのだけれど、中央大学の学生は一般学生に比べて世の中のことを知らないと言うんだね。

—— 厳しいですね。

足立 それから、集団面接をやったときに、(中央大学の学生は)おとなしい、積極性がない、周りの人達を気にしすぎる。他の人が言うことについていくだけで、リーダーシップが取れない。

それから、勉強していない(笑)。労働法のことを知っているかと聞いたら、よくわかりませんと言った。そんなことってある？

—— それは、ちよつと？

足立 労働法の内容を知らなかった。勉強していない。新聞を読んでいない。それから本も読んでいない。アルバイトはするけれども、居酒屋だとかコンビニ、それからファストフード、今の学生はそういうアルバイトが多い。中央大学の学生



人事担当者から聞いたメモを手に答える足立社長

大変残念なことは、社会人になったときに挨拶が一番大切なのに、その挨拶ができないこと。会社の学生採用を担当する人が大学を訪問したときは、この大学はいい大学かどうかということを見ている。ところが中央大学の学生は、挨拶ができていない。

今朝、その中央大学出身の採用担当役員がそう言っていた。

だから、(大学に) 部外者が入って来たときに、学生がちよつと頭を下げて、「いらつ

は、八王子にいるものだから、世の中のことを知らないというのです。そんなことはないよな。それから、良いのは、ものすごく真面目だと。素朴で純朴であると。

—— それはよく言われますね。

マナーと挨拶の仕方を知らない

「いらつしゃいませ」と言おう

足立 人をごまかしたりするとか、そういうこととはない。それから、どちらかというと、地方から出て来て裕福な人がいて、お坊ちゃんのような学生が多い。

なりたかったのは新聞記者

2番目に受かった凸版に入社

—— お話に戻ってしまうのですが、学生時代に凸版印刷に入社しよう、入社試験を受けてみようと思われた動機をお聞きしたいのですが。足立 難しいことを聞くね(笑)。本当のこと

を言つて、僕は新聞記者になりたかつたんだよ。親父も兄貴2人も朝日新聞の新聞記者だったから、それになりたと思つた。でも、見事に落ちてしまった。入りたくても行けなかつた。今は就職の学校推薦というのがあるの？

—— 文系にはないですね。

足立 我々のときには学校推薦というのがあつた。当時、(就職部に) 学校推薦の貼り紙がたくさんあつてどこに行こうかと、その中から選んだのが、映画会社だつた。その当時、その映画会社に入るのは大変難しかつたが、社長が、中央大学の理事だから、中央だけは別枠で入る制度があつた。そこに受けに行つたらあることがあつて、憲法論争になつてしまつた。

「憲法第9条をどう思うか」「自衛隊をどう思うか」なんていう質問がどんどん飛んできても、学生だから血気にはやつて正論を言うわけでしよう。いろいろ例題が出てきたから、そういう仮定の例題では話にならないとか言つたら、喧嘩となつて、「帰れ」と言われたので帰つちやつた(笑)。

また、今と違って当時は、学校推薦で行つて一番初めに採用された会社に行かなければいけないという就職協定がありました。実は凸版印刷は、二番目に受かつた会社だつたのです。僕がどうしても凸版印刷に入りたいと言つたら、当時の就職部の事務員に怒られてね。凸版印刷に行つても

らつては困る、一番目に受かつたところに行つてくれなんて、言うものだから、職業選択の自由はどうあるんだなんていう話をしてね(笑)。そんな学生ならではの血気にはやつた議論をして、凸版印刷に入つたのです。

失敗を次のチャンスに生かす

嘘をつかず、責任を転嫁しない

—— 入社されて、成功談とか失敗談はございますか。

足立 仕事のうえで成功と失敗は相半ばですかね。私はずっと営業育ちですから、お客さんとの間で仕事がうまくいかないとか、いい仕事を納めることができなかつたとか、仕事上の失敗例なんていうのはいっぱいありますけどね。人間は忘れる動物だと先ほど言いましたが、仕事にも失敗はつきものなんですよ。大事なことはその失敗をどう次のチャンスに導くことができるのかどうかですよ。

失敗したことにちゃんと一生懸命対応していけば、今度は逆にお客さんから信頼を受ける。失敗したけれど、その後の事務処理が大変良かったというところで、いい方向に返ってきますからね。失敗したことが逆に成功になっていくこともあるわけです。だから、失敗から逃げないで解決していく。

それと、絶対に嘘をつかないこと。ごまかしをしないということです。誠心誠意対応する。間違つたときには、本当に「ごめんなさい」と言うことです。変な理屈を言わない。本当に心底からごめんなさいと言つて、正直に話をする。

それから、責任を人に転嫁しない。自分の責任で仕事をやっていく。誰それが、この人が悪かつたから事故が起きたではなくて、事故を起こしたのは自分なのだ。責任は絶対に転嫁しないということです。

仲間や同期を絶対裏切らない

経験を積み自分の血と肉にする

—— 他に社会人として大事なことはありますか。

足立 社会人で大事なことは、やっぱり正々堂々と生きることですよ。それから、コミュニケーションをどううまく取るか、仲間をどう大切にするか、だよ。僕はよく言っているのだけれども、学生時代には大学の仲間を大切にしてもらいたい。それが将来、変な打算ではなくて、いつか同窓が助けてくれるときが来る。自分が本当に悩んだりしたときに、相談相手になつてくれるのは大学時代の仲間なんだよね。

それから、会社に入つても、同期を大切にしろと言っています。何かのときに助け合う。そうい



の中でも通じる。

—— 社長は先ほど「失敗を成功に変える」というお話をされましたが、それにはやっぱり強い心が必要だと思ふんです。その強い心が社長の中にある理由は。

足立 それは自信の裏付けなんだよ。自分がやっていることに常に自信を持ってやらないとね。その裏付けは本を読んだり、社会の中に飛び出していつて経験を積んだり、いろいろなことをやって、自分の中の血と肉にして、そいつが自信となって物事をちゃんと判断するということだよな。

足立社長は「汗をかくことが大事」と

持つて欲しい生き様のビジョン

考える人間になり人生哲学を

—— 学生にこれだけは心掛けろというメッセージをいただきたいのですが…。

足立 僕は、学生は学生としてのビジョンを持たなければいけないと思う。私は何になりたいのだ、今はどういうことに精力を注いでいるのだというビジョンを学生に持つてもらいたい。

—— ビジョンというのは、具体的に職業観みたいなものですか。

足立 職業観であろうと、自分の生活観である

うと、こういう人間になりたいとか何でもいいと思うのです。例えば就職するのだったらこういう会社に勤めてみたいということもひとつにはあるでしょう。けれども、やっぱり自分の人生でどういう生き様をするのだというビジョンをちゃんと持たなければいけないと思います。

ただ毎日ふらふら流れているのではなくて、自分の生き様に対するビジョンを持ったほうがいいと思いますよ。それが今の学生には少ないのではないですか。どうですかね。そういう感じがしてしようがない。

—— 先ほど中央大学の学生は、周りを見てから行動するというご紹介がありました。それはやはりビジョンがないから引つ張つていけないということなのでしょうか。

足立 やっぱり行動の裏付けがないのですね。自分が議論の輪に入ったときに、ちゃんとした思想がない、哲学がないのです。こうあるべきだということがあれば、ドーンと言えますよ。それはやっぱり自分の人生に対する哲学がないということです。

—— その哲学を持つためには、どうしたらよろしいですか。先ほど本をいっぱい読めというお話がありましたけれども。

足立 それは生き様をどうするのかということ、常に考える人間になっていくかどうかですよ。

う仲間をいかにたくさん持つているかどうか。そのためには、仲間を絶対に裏切らないということですよ。仲間に裏切られてもいいから、自分は裏切らないということです。そうするとみんながついてくる。部下もついてくるよ。

あと、会社に入つて大切なのは、汗水たらして働くことだよ。一心不乱に働くことだよ。汗水たらさなきゃ駄目。

—— 何事も本気になってやるといふことですね。

足立 そうそう。一生懸命やるといふこと。それは相手に通じるから。仲間にも通じるし、会社

物事を常に考えているかどうか。人生について考えることが少ないのではないのかな。

「仕事の報酬は仕事」だ

現場に行き、体で感じる

——「人生」を考えると、「仕事」観につながる…。

足立 社会に出たとき、それは単にお金を稼ぐのが目的なのですか？僕は違うと思うんですよ。僕はいつも会社で「仕事の報酬とは何か」という質問をしているのです。仕事の報酬って、お金、給料？しかし、本当は違う。「仕事の報酬は仕事」だと言っているのです。

凸版印刷がいい仕事をすれば、次もお願ひしますと仕事が来る。凸版印刷に頼めば間違いないから、またこういうカタログを作つてよ、ということになる。そうすると、また仕事が増えていくわけ。適正なお金で仕事が増えてくると、会社に利益が残って、それを給料として社員に還元することができるといふことだよ。だから、いい仕事をやるのだと言っている。

それと同じで、友達と付き合うときには打算ではなくて人間として付き合っていく。打算に走らない。

それから何か事があったときには、現場に立つということ。経験を積むということは、現場に行つ

てみて、体で感じるということだよ。そういうことをくり返していくといい仕事ができるようになるのではないですかね。

もつと卒業生と学生が交流を

もつと中大ブランドを売り出す

——実際に社会に出て仕事をされている先輩

方ともつと交流できたらいいなと思います。

足立 先輩と後輩との交流があまりないんですよ。いい意味での交流というのがない。同窓意識というのが、中央大学には欠けていると思つています。だから、いい意味での同窓意識をどう芽生えさせるか。先ほど言つた同期の仲間や先輩を大切にすることによって、そこでいい意味での情報源ができる。

もうひとつは中央大学という大変なブランドがあるわけです。これをもつと大切にしなければいけないですよ。中央大学をどうやってもつともつと売り出すのか。

我々が学生の頃は、何だかんだ言つて中央大学のイメージは法曹界ですよ。

今でもやっぱり法曹界ですよ。それが法科大学院をつくり、今度はビジネススクールをつくつた。それで産業界をまともていくということで、一生懸命にやっ

てやつと今、南甲倶楽部の会員になったのが840〜850人かな。みんな、卒業したら南甲倶楽部に入つてよ（笑）。

——はい（笑）。

足立 南甲倶楽部なんて摩訶不思議な名前ですよ。何だと思う？中央大学の駿河台校舎があったところが、昔は南甲賀町と言つたのです。それで南甲、ということなんだよね。

南甲倶楽部には、産業界で活躍されている方がたくさんいらつしやいます。

南甲倶楽部名誉会長の鈴木敏文さんは、セブン&アイ・ホールディングス会長を務めていらつ



ざっくばらんにインタビューに応じる足立社長



緊張気味の学生記者

しゃいますし、副会長の御手洗富士夫さんはキャノンの会長でもあり、経団連の会長として日本の経済界を牽引されています。同じく副会長の鈴木修さんは自動車のスズキ株式会社社長、有富慶二さんはヤマトホールディングスの会長としてご活躍されています。

そういう人達が「中央大学だ、中央大学だ」と言ってくれているから、ここ3年間ぐらいで中央大学の受験生が増えて、今年は8万5000人を超えたのかな。2、3年前は6万人台だったのが8万人になった。それだけビジネス界でも中央大学が有名になってきた。

中央大学というのは法律だけではなくて、経済学部や商学部のいろいろなところから集まって総合大学として、社会に貢献できるような人達がたくさん出てきた。そういうことでブランドが上がってきているわけです。

僕が卒業式に行つて大変残念なことがある。僕は理事だから壇上に並ぶのだけでも、校歌を歌う人がいない。みなさんは校歌知っている？

卒業式で校歌を歌わない学生 応援歌を肩くんで歌おう！

—— 知らないんです。

足立 そうでしょう。校歌を歌う人がいないんだよ。『惜別の歌』知っている？

—— いえ、知らないです。

足立 卒業式には校歌と『惜別の歌』を歌うのだけど、学生は誰も歌わないんだよ。(歌うのは)壇上にいる理事と先生だけなんだよ。

我々のときには校歌と『惜別の歌』を歌って、何かというと応援歌も歌ったものだよ。島崎藤村の『惜別の歌』に中央大学の卒業生が曲をつけてね。中央大学の歌なんだよね。でも誰も歌わない。僕に言わせれば、学生はそういうふうになり下がってしまった。僕はいつも、クラブ活動で校歌と『惜別の歌』を歌ってくれと言っているんだよ。

—— 同窓意識が薄くなってしまうって？

足立 そう、薄くなっている。そう思わない？ 校歌『惜別の歌』を歌おうよ。そういうところに、中央大学というひとつの団結心があったんだよね。応援歌を肩組んで歌っているという姿が今はないでしょう。校歌は、学校で流しているんじゃないの？

—— お昼に流しています。

足立 流すようにしたでしょう。『惜別の歌』も、これが歌えることで商売でものすごく良くなったことがあった。仲良くなった人が転勤でどこかへ行くじゃない。そのときに『惜別の歌』を歌ってあげるんだよ。そうするとお客さんがみんなジーンときてね、別れがたいと言つて帰つて行く。そして、僕のことをずっと覚えていてくれる。その人がどこかへ行って帰ってきたときに、足立さんに『惜別の歌』を歌ってもらったと言う。世の中というのはそういうものだよ。

—— 今度、お目にかかれる時までには校歌、『惜別の歌』を歌えるようにしたいと思います。きょうは、大変貴重なお話をうかがうことができました。長時間ありがとうございました。

インタビュ―

学生記者 伊藤知広(経済学部4年) / 池野絵美(文学部3年) / 池谷祐宜(商学部3年) / 野村茉莉亜(商学部3年) / 山岸怜奈(総合政策学部3年) 十編集室